

⑩ 春の水田雑草

日本列島の平野部は、稲作農業が始まる前までは、一面ヤナギの林やヨシ原であったと思われます。縄文時代の人たちにとって、そのような低湿地は、全く役に立たない場所でした。けれども弥生時代になると、平野部の土地は次第に水田に変えられていきました。そして現在では、平野部の本来の自然は河川敷などごく限られた場所に残されているに過ぎません。

その水田も、時代と共に大きく変化しています。最近の水田は耕地整理が進み、ほとんどが長方形で形が揃っているものになっています。また排水も進み、ほぼ全部が冬季には水のない乾田になっています。しかし一昔前まで、水田は形も大きさもばらばらでした。一年中水の抜けない湿田も多く見られました。耕作する人は大変だったでしょうが、日照りの年に田んぼの水がなくなって稲が枯れてしまうことを思えばそのくらいたいしたことはない。少しでもとなりの田よりたくさん水が来るよう、競って水田面を掘り下げました。これが本当の我田引水です。掘った土は捨て場がないので、1カ所にまとめて積み上げました。積み上げたところは仕方がないので畑にする。そのためところどころに島のような畑ができる。これを島畑といいます。不規則な形の水田のところどころに島畑があるという景観は、濃尾平野の原風景といってもよいでしょう。一宮市の丹陽地区にはこの島畑景観がまとまって残されていて、重要文化財級ではないかと思うほどです。

そのような水田には、本来の低湿地からその場所に逃げ込んだ生物を含めて、さまざまな生物が生育・生息していました。しかし水田環境の変貌に伴い、そこにすむ生物も大きな影響を受けています。

水田の生物について調査すべきことはいろいろありますが、植物関係は耕起前の水田雑草に限り、「一昔前の水田に多かったが、現在はどこにでもあるというわけではない植物」を対象を絞りました。このような植物が多く見られるのは、昔ながらの状態が比較的残されている水田です。スズメノテッポウ、カズノコグサ、タネツケバナなどはまだあちこちにあるので、今回の調査対象からは除外します。本当はスズメノカタビラ（路傍などに普通に生育してたいいていの人々が「これがスズメノカタビラ」と思っている植物は、全体に小型で小穂が緑色で、正しくはアオスズメノカタビラと呼ばれるヨーロッパ原産の帰化植物です。本物のスズメノカタビラはやや大型で小穂が紫色を帯び、現在では耕地整理の進んでいない水田で、耕起前の雑草として見られるだけです。スズメノカタビラのようなありふれた植物にも、よく見るといろいろ面白い問題が隠されています）も調べてほしいのですが、識別がやや難しいかもしれません。

【 形 態 】

誰にもなじみ深い植物で、多くの説明は要しないと思われる。似た種類はなく、識別も容易である。

【 分布と生態 】

中国大陸原産で、平野部の耕起前の水田に多い。緑肥として播種されたもの他に、逸出して野生化したものもある。前者は特定の水田だけに一面に生育するが、後者はあちこちの水田の縁などに少量ずつ生育しているから、できれば生育状態も記録してほしい。最近では観光などのために、ゲンゲ自体を目的として播種されることもある。このようなものは本来の調査目的とは異なるのでその旨記録しておく必要があるが、現実問題としては区別が困難なこともある。

【 撮影のポイント 】

花だけを拡大せず、植物全体がわかるように写す。できれば全体の景観も撮影する。



花は輪になってつく

(長久手市, 2013-4-4, 星野智司)

外 ゲンゲ (レンゲソウ) 真正双子葉類 マメ科 *Astragalus sinicus* L.

はる た あか はら
春のたんぼは赤い原

春の水田と言えば、先ずレンゲソウ（植物名としては、「ゲンゲ」といいます）を思い浮かべる人が多いと思います。レンゲ畑の中で相撲を取ったり、48頁の写真のように花を摘んで花輪を作ったりして遊んだ記憶のある人も多いと思います。しかし、そのようなレンゲ畑も、最近はいぶが少なくなりました。

ゲンゲは中国大陸原産の植物で、もともとは緑肥として、耕起前の水田に播種されたものです。日本本来の自然要素ではないのですが、今回はあえて調査対象に取り上げてみました。

小穂は比較的
大きい



(豊橋市, 1996-6-8, 芹沢俊介)

【形態】

稈は束生して直立し、高さ 20～60cm になる。葉は白緑色、稈基部のものは葉身が長く葉鞘が短い、上部のものは葉鞘が長くなる。茎の中上部の葉の葉身は長さ 3～10cm、幅 3～8mm、葉舌は白色膜質で長さ 2～4mm である。花果期は 4～5 月、花序は円柱形で長さ 4～7cm、幅 5～8mm、小穂は密集してつき、扁平で長さ 5～6mm、1 小花からなり、長い芒がある。葯は白色～黄白色である。

【分布と生態】

本州(関東地方以西)、四国、九州。日本～中国大陸南部。

【よく似た種】

スズメノテッポウとの違いは概説参照。

【撮影のポイント】

小穂が大きいことが特徴なので、種名確認のためには花穂の部分大きく写すとよい。

【参考資料】

県 GDB①p.244

セトガヤ 単子葉類 イネ科

Alopecurus japonicus Steud.

はる すいでん なら ほ
春の水田に並ぶ穂

耕起前の水田に生育する 1 年生草本。代表的な水田雑草の一つであるスズメノテッポウと同属の植物で、それよりずっと少ないのですが、それでもよく探せばまだあちこちで見ることができます。スズメノテッポウからは、小穂が大きく、芒が長く、葯が白いことで区別できます。名前は背戸茅で、家の裏手の田に生えるカヤという意味です。

本種を含む以下の 4 種は、どれもあまり目立つ植物ではありませんが、昔ながらの状態が残されている水田のよい指標となります。

【 形 態 】

1 年生草本。茎は高さ 40～50cm になり、小斑紋があることが多い。節は多少紡錘状にふくらむ。葉は対生し、長さ 1～1.5cm の柄があり、葉身は披針形～広披針形、長さ 5～10cm、幅 1～2.5cm、全縁である。葉鞘は膜質、長いもので長さ 10～13mm、先端部に毛はない。花は 5 月に咲くが、秋にも咲くことがあり、淡紅色、茎の先端の花序は長さ 2～4cm であるが、茎上部の葉腋にも短い花序がつく。花が白いものをシロバナサナエタデ、葉裏が白色のものをウラジロサナエタデという。

【 分布と生態 】

北半球に広く分布し、日本でも北海道～九州に見られるが、山地には生育していない。

【 よく似た種 】

ハルタデは葉鞘の先端に短い毛がある。オオイヌタデは夏～秋に咲き、全体大形である。



葉鞘の先端
に毛がない

(春日井市, 2018-10-2, 芹沢俊介)

サナエタデ

真正双子葉類 タデ科

Persicaria lapathifolia (L.) Delarb. var. *incana* (Roth) H.Hara

はる すいでん

春の水田に生えるタデ

耕起前の水田で、他の草よりやや背が高くなり、淡紅色や白色の花をつけるタデの仲間。タデの仲間には多くの種類がありますが、春先に咲くのは本種とハルタデだけです。ですから、この季節ならば、他の種類は考慮なくてよいと思います。名前は、早苗を植える頃咲くタデという意味です。秋にも咲くことがありますが、秋には他に多くのタデ類が咲いているので、識別が難しいかもしれません。基準変種のオオイヌタデは夏～秋に咲き、大型で、茎は高さ 1m 以上になります。



花は小さく白色

葉のへりに
鋸歯がある

(清須市, 2001-5-21, 芹沢俊介)

【形態】

茎は直立または斜上し、高さ10～50cmになる。葉は対生し、無柄、長さ2.5～8cm、辺縁には鋸歯がある。花期は5～6月、葉腋から長さ5～15cmの細い花序を出し、15～50個の花をつける。花冠はほとんど白色で4裂し、直径3～4mmである。

【分布と生態】

本州(中部地方以西)～琉球に生育し、国外ではインドまで分布している。愛知県では現在のところ生育地も個体数も多いが、湿田の減少に伴い、減少傾向にある。

【よく似た種】

オオカワヂシャは本種に似ているがより大形で、青色のオオイヌノフグリに似た花をつける。

【撮影のポイント】

全体の写真のほか、できれば葉の形状がわかる写真も写すとよい。

【参考資料】

県 RDB 植 p.691

カワヂシャ 真正双子葉類 オオバコ科

Veronica undulata Wall.

めだ はな じつ じゅうよう 目立たない花でも実は重要

低湿地に生育する越年生草本。湿田状態が多少なりとも残されている場所では、春の水田雑草になっています。水田面のほか、水路の岸などにも多く見られます。春の路傍などに多いオオイヌノフグリと同じ仲間ですが、花は白くて小さく、すぐ落ちてしまいます。近畿地方などでは近縁の外来種であるオオカワヂシャが増加し、それに圧迫されて減少傾向にあるようです。愛知県でも最近豊川や庄内川でオオカワヂシャが増加しており、今後注意が必要です。オオカワヂシャは、帰化植物の調査対象種として126頁でとりあげました。



葉は羽状に
切れ込む

(刈谷市, 2000-4-17, 芹沢俊介)

コオニタビラコ 真正双子葉類 キク科

Lapsanastrum apogonoides (Maxim.) J.H.Pak et K.Bremer

はる ななくさ

春の七草のホトケノザ

【形態】

根出葉はロゼット状に拡がり、長さ 2~10cm の柄があり、葉身は長さ 2~8cm、羽状に中~深裂する。茎は束生し、長さ 10~40cm になる。花期は 3 月下旬~5 月中旬、頭花序は茎の先端や上部の葉脇から出て、上部で分枝し、数個の頭花をつける。頭花は黄色で小花は 6~9 個、花弁は長さ 5~6mm、そう果は長さ 3~4mm で、先端に微小な鉤がある。

【分布と生態】

日本~中国大陸に分布し、国内では本州~九州に生育している。県内の人里にも広く見られる。

【よく似た種】

ヤブタビラコは果時の総苞が球形になり、そう果は長さ約 2.5mm である。

【参考資料】

県 GDB①p.303

越年生草本。春早く黄色の花を咲かせます。春の七草のホトケノザは本種で、地表に展開するロゼット葉が仏の座のようだからです。タビラコは田平子で、これもロゼット葉の形態によります。しかしキュウリグサも田平子と呼ばれるので、それと区別するため「コ」と「オニ」という相反するような語が二重につけられています。

春の七草は、セリ、ナズナ、ゴギョウ(ハハコグサのこと)、ハコベラ(ハコベ)、ホトケノザ、スズナ(カブ)、スズシロ(ダイコン)です。しかし本種以外は、水田の指標にはなりません。